

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520637

研究課題名（和文）西洋中世の環アルプス圏における移動とコミュニケーション

研究課題名（英文）Transference and Communication in the Alpine Ring during the Middle Ages in Europe

研究代表者 千葉 敏之（CHIBA TOSHIYUKI）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：20345242

研究成果の概要（和文）：本研究は、10・11世紀のアルプス山脈とその周辺地域を「環アルプス山圏」と定義し、アルプスを走る複数の峠を行き交う人・モノ・情報等に着眼することにより、従来の国家史では捉えきれなかった中世ヨーロッパ社会の一面を明らかにした。とくに、隠者や改革派修道士、高位聖職者が移動や図書の貸借を通じて、改革思想や先端的文物の伝播に大きな役割を果たしていたことが、本研究によって解明された。

研究成果の概要（英文）：This study figured out a dimension of the medieval European society, which has not been captured in the light of the traditional nation-centered historiography, by means of focusing on people, goods, and information traversing the passes in the Alps mountainous area. In particular, it was elucidated by the present study that reformist monks, hermits and prelates, through their moving and the loan of books, played a major role in the propagation of ideas of reformation and the diffusion of newly developed artifacts.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史、中世史、移動、山岳、異文化交流、交通、地図学、峠

## 1. 研究開始当初の背景

近年、もっぱら国家領域のみを分析単位とする研究が歴史学全般において再検討され、より柔軟な地理的単位・空間単位を対象として設定することで、国家史的な観点からは捕捉しきれなかった歴史社会の実態や現象を、捉え直そうという試みが現われてきている。すなわち、設定した《問題》に応じて、研究対

象地域の広狭を定める、《問題地域》の手法である。西洋中世研究においても、中世国家の形成史、神聖ローマ帝国の国制といった従来の制度史的視点を越えて、地中海やバルト海、黒海等の《海》を活動圏とする諸勢力が織り成す歴史社会を解明するために、海とその周辺域を《海域》(maritime area)と定義する、画期的な研究が出始めている。

本研究は、この海域という着想を応用し、ある山をめぐる国や地域、人間集団などの周辺勢力が活動する、その活動圏域を《山圏》(mountainous area)と定義したうえで、ラテン＝キリスト教世界の形成、ヨーロッパの成立にとって決定的に重要であったアルプス山脈とその東西南北の山麓地域を《環アルプス圏》(pan-alpine area)と定義し、同圏域内を巡る人・物資・情報・文化について、その移動とコミュニケーションのあり方を研究するものである。環アルプス圏に含まれる地方を具体的に列挙すると、スイスの諸地方、ブルゴーニュ地方、アレマニア(シュヴァーベン)地方、バイエルン地方、ロンバルディア地方、ティロル地方となる。ただし、移動は、修道院から修道院へ、王領地から司教座教会へ、宮廷から都市へ、といった、点から点への移動がほとんどである。また、アルプス山脈を通過する移動＝《アルプス越え》(transalpine itineration)も、本研究の考察対象となるため、実際の対象地域はさらに広がる。

## 2. 研究の目的

近代歴史学の諸研究は、近代の国民国家を単位として進められてきた。したがって、近代歴史学を基盤とする現代歴史学の諸研究も、近代歴史学の遺産を、問題関心や分析手法とともに継承している。史料の保管や刊行は国家単位でなされ、学会も多くは国家単位である。そして、何よりも、研究言語が何語であるか、ということが、研究者の発想や研究活動を拘束していることが、多々ある。

しかし、中世のヨーロッパでは、少なくとも知識人は、中世ラテン語を共通言語としており、また聖職者(高位聖職者は同時に、知識人階層に属する)が教会で執り行う儀式も、聖書に使われている言語も、学術活動に使う言語、書簡に用いる言語、公文書に用いる言語、その全てがラテン語であった(後期中世には俗語が台頭してくる)。そのため、とくに知識人たる高位聖職者や修道士は、国境や地域の境を越えて移動しながら、キャリア・アップをはかり、彼らの移動が、当時の政治や経済、とくに文化や思想、文物の流通・波及・伝播に多大な影響を及ぼしていたのである。

本研究の目的は、したがって、研究言語や国単位の構想をこえ、ヨーロッパ中世のコモポリタニックな文化のあり方を、当時そのままに理解するために、その第一の分析対象として、上で定義した環アルプス山圏を、10・11世紀を中心に、実証研究することにある。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究

は、以下の5点について分析を行なう。

### (1) 移動経路

アルプスを通過する場合の経路(ルート)について、入口、峠、出口の位置を確定する基礎作業の他、経由する教会、修道院、王領の位置と、ルート選択の理由を明らかにする。

### (2) 人材の移動

宮廷間、各地から宮廷に集中する人材移動とともに、教会人の移動、とくに11世紀の教会改革の時代における改革派修道士の移動、12世紀における異端運動の伝播過程等、各次元での人材移動を解明する。

### (3) 物資の移動

商人文書が未発達の中期中世に関しては、国王証書、年代記、書簡、地誌等から物資の移動を数量的と同時に質的に把握することが必要となる。この時代の統治システムである移動宮廷が物資を現地で消費する体制であること、また市場経済が未成熟であり、広域の物流が本格化していない状況を踏まえ、物資の移動の「質」の解釈を行う。

### (4) 文化の移動

イタリア都市における書記技術・行政文書作成術がドイツの国王宮廷へ伝えられたケース、(2)に挙げた異端運動の伝播過程、教会改革の導入、修道院間の写本の移動、ローマ巡礼等、文化的・宗教的なインパクトを移動先に与える移動を扱う。

### (5) 移動の政治性

移動そのものが政治性を帯びているケースとして、ドイツ国王のローマ行(皇帝戴冠)、ローマ教皇のアルプス越え、イタリア王位を兼任する神聖ローマ皇帝のパルマ訪問等、アルプスを越えて移動することに高度な政治性が備わる場合を扱う。

本研究では、以上の5点を軸に研究をおこなうが、時間的制約から、その前後にも眼を配りつつも10～11世紀に焦点を絞り、移動経路と移動実態の正確な把握(1)を第一目標とする。その上で、(2)のうち、教会人の移動、(4)のローマ巡礼、(5)の皇帝・教皇の移動の解明を、第二の目標と位置づける。

本研究では、以上の5点を軸に研究をおこなうが、時間的制約から、その前後にも眼を配りつつも10・11世紀に焦点を絞り、移動経路と移動実態の正確な把握(1)を第一目標とする。その上で、(2)のうち、教会人の移動、(4)のローマ巡礼、(5)の皇帝・教皇の移動の解明を、第二の目標と位置づける。

## 4. 研究成果

計画初年度にあたる平成20年度には、研究体制の整備と基本的な研究文献・刊行史料の収集・購入、および上記(1)の移動経路に関する基礎的分析作業が中心となった。

具体的には、(1)データ解析用のパソコンの購入、(2)中世アルプスに関わる旅行案

内・旅行記・巡礼記・地図史料のリスト作成と刊行史料の購入、(3) 上記史料の分析と移動経路のデータベース化、(4) 未刊行史料の文書館での収集、移動経路の実踏調査（夏期に海外出張を実施）、である。踏査によって得られた地形・旅程に関わるデータをまとめ、それを関連する史料箇所と照らし合わせ、また既存の研究成果と批判的に照合する作業を行なった。この作業で得られたデータは、次年度以降の研究の基礎となった。

さらに、アルプス文化圏（とくにイタリア）からエルサレムに巡礼し、帰国した聖職者や商人が、聖地巡礼の記念としてエルサレムの聖墳墓教会を模した「擬聖墳墓」を建造した事実について、とくに集中的な調査を行なった。その成果は、他の事例と比較しつつ、論文「都市を見立てる—擬聖墳墓建造に見るヨーロッパの都市観」にまとめた（共編著、東京大学出版会、2009年5月刊行）。

第2年目にあたる平成21年度は、前年度に構築した研究基盤をもとに、本格的な調査・史料分析を行なった。研究の具体的な活動と成果は、以下の4項目に集約できる。

(1) 前年度の、史料分析及びデータベース化作業を継続し、研究第一段階（経路研究）をほぼ完了した。

(2) 10・11世紀における改革派修道士、聖職者の移動件数、所属・地位、移動理由の調査を行なった（とくに教皇シルヴェステル2世の動向を中心に）。

(3) 10・11世紀におけるローマ巡礼の動向と、アルプス以北の聖俗高位者のローマ訪問の件数と目的に関する調査に着手した（エルサレム巡礼および巡礼者の帰国後の行動との比較的観点から）。

(4) 前年度の移動経路のデータベース化とともに、(2)(3)の分析結果のデータベース化に着手した。

これらの研究課題を遂行するにあたって、夏期にアルプス圏への海外出張を行ない、アルプス圏の移動経路上にある修道院および都市を訪問し、現地文書館や図書館において関連史料を調査し、研究文献の収集にあたった。今年度はとくに、サン・ゴタル峠、トリノからプロヴァンスへ抜けるルート（タンド線）を中心に調査を進めた。これらの研究活動をもとに、紀元千年における教皇シルヴェステル2世（ジェルベール・ドリャク）の自己形成と経歴（アルプス越えを中心に）、当時の修道院・教会改革運動や神聖ローマ皇帝権、カペー朝王権との関わり、さらには紀元千年の学問知の転回や新たな知の伝播との関係を論じる研究論文を執筆した（「秘義・啓示・革新—ジェルベール・ドリャクとオットー3世の紀元千年」深沢克己・桜井万里子編『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』東京大学出版会、2010年）。

3年目にあたる平成22年度には、研究体制のさらなる整備と研究上必要な文献・史料の収集・購入とともに、上記(2)の写本の移動と環アルプス圏修道院の役割に関する分析を継続し、上記(3)の調査を開始した。詳細は、以下の通りである。

(1) 前年度の、人材の移動に関するデータベース化の完了と研究成果の一部公開

(2) 10・11世紀を中心とした写本の移動・貸借についての調査（書簡史料・蔵書目録の分析）

(3) 環アルプス圏に集中する、高度な写本作成技術をもつ修道院の役割についての考究

(4) (2)・(3)の結果を踏まえ、環アルプス圏における修道院の役割を、写本の流通という観点から総括

平成22年度の研究は、写本の移動を主な分析対象とした。写本の追跡調査に際しては、国際古文書学連盟が進める「日付つき写本カタログ」（Kataloge der datierten Handschriften）事業の成果を活用するとともに、その不足分・未刊行分については、現地での文書館調査によって十分に補った。そのため、夏期に約3週間の海外現地調査に出かけ、文書館での調査を行なうとともに、改革派修道士の移動経路の踏査のために、フランス南東部、スイス、北イタリア、ドイツ南部の拠点的修道院・教会を訪問した。

最終年度にあたる平成23年度の研究成果は、以下の通りである。第一に、アルプス以北のゲルマニアおよび環アルプス圏を含め、北イタリア、ローマを統治権下に置いていたオットー朝神聖ローマ皇帝、とくにオットー3世は、教会改革者の移動によって確立されていた改革派ネットワークと並行して、当時イタリア半島全域に広がりつつあった隠者（隠修士）を束ね、彼らを自身の帝国理念の実現に積極的に活用したこと。第二に、紀元千年における教皇シルヴェステル2世（ジェルベール・ドリャク）もまた、教会知識人として自己形成・キャリア形成の過程で、改革派のネットワークを活用しつつ、これを広げ、紀元千年の学問知の転回や新たな知の伝播に貢献したこと、である。

さらに、本研究を通じて、改革派知識人の移動経路、移動者・移動物資の性格等の観点と、移動の経費の問題と、同時期にイタリア半島を中心に形成されつつあったギリシア典礼と隠者のネットワークとの関連をさらに詳細に分析すべきことが、今後の研究課題として確認できた。

申請者が専門とする紀元千年期（950-1050年）を中心に、4年間という限られた研究期間の中で実現可能な課題を予め設定し、最終年度の今年度の現時点までに、以下の具体的な成果を上げることができた。

以上、本研究4年間の成果を総括すると、以下の通りとなる。

(1) 擬聖墳墓の建造と普及：環アルプス圏からエルサレムに巡礼し、帰郷した聖職者・商人等が、聖地巡礼の記念として、エルサレムの聖墳墓教会を模した「擬聖墳墓」の建造をおこなった事実についての研究を行なった。さらに、その成果を、論文「都市を見立てる—擬聖墳墓建造に見るヨーロッパの都市観」として刊行した(2009年)。

(2) 改革派修道士の移動と知の伝播：10・11世紀における改革派修道士、聖職者の移動件数、所属・地位、移動理由の調査、10・11世紀におけるローマ巡礼の動向と、アルプス以北の聖俗高位者のローマ訪問の件数と目的に関する調査を行なった。その成果をもとに、紀元千年における教皇シルヴェステル2世(ジェルベール・ドリャク)の自己形成と経歴、当時の修道院・教会改革運動や神聖ローマ皇帝権、カペー朝王権との関わり、さらには紀元千年の学問知の転回や新たな知の伝播との関係を論じる研究論文「秘義・啓示・革新—ジェルベール・ドリャクとオットー三世の紀元千年」を公刊した(2010年)。

(3) 紀元千年期における写本の移動・貸借：書簡史料・蔵書目録の分析、環アルプス圏に集中する高度な写本作成技術をもつ修道院の分布と蔵書、役割についての調査を実施した。

上記の研究を実施する過程で、新たに課題として浮かび上がったのは、移動経路、移動者・移動物資の性格等の観点に加え、その移動を誰が求め、誰が経費を支弁したかという問題である。とくに、高度な知性と霊性を兼ね備えた修道士・聖職者の移動には、王侯や教皇、司教等による「招致」(経費負担、通行許可等のケアを含めて)が前提となる。クリュニー系の修道院・教会改革者や霊性の誉れ高い隠者は、改革や霊性の刷新を求める各地の教会領主から招致されることで、頻繁かつ広域に移動した(クリュニー修道院長オド、オディロなど)。また、教会・修道院の改革には蔵書内容の変化と並んで、聖堂の建設・改築・装飾といった物理的な変化を伴うことが多く、さらにはモデルとなった教会・修道院の守護聖人が、改革後には、現地の聖堂の新しい守護聖人となった。

一方で、アルプス以北のゲルマニアおよび環アルプス圏を含め、北イタリア、ローマを統治権下に置いていたオットー朝神聖ローマ皇帝、とくにオットー3世は、教会改革者の移動によって確立されていた改革派ネットワークと並行して、当時イタリア半島全域に広がりつつあった隠者(隠修士)を束ね、彼らを自身の帝国理念の実現に積極的に活用した。オットー3世はローマの隠修士系修道院(聖ボニファーチョ=アレッシオ修道

院)の修道士を、ポーランドなどへのキリスト教伝道のために派遣する一方、自身は999年、隠者ロムアルドゥスの勧めで、聖ミカエル崇敬の本山モンテ・ガルガーノに参籠した。つまり、自ら隠者として振る舞ったのである。紀元千年を前に終末意識が高揚する中、王が聖山に参籠した理由は何であったのか、これを機に聖ミカエル崇敬がイタリアから環アルプス圏を経てフランスやドイツに波及した理由は何であったのか。これらの問題の解明は、西洋中世における王と隠者の関係、統治理念と隠者的霊性との関係の解明に役立つだけでなく、西洋中世の移動・コミュニケーション研究にも大きく資することとなる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 千葉敏之、幽閉と「政治的無害化」の作法—「間」の歴史学から見た中世ポーランド、東欧史研究、30、2008、3-19、査読有

〔図書〕(計6件)

- ① 羽田正、千葉敏之(7名中7番目)、山川出版社、新世界史、2012、448、128-163
- ② 深沢克己、千葉敏之(9名中2番目)、東京大学出版会、友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで、2010、347、71-108
- ③ 千葉敏之(訳)、講談社、西洋中世奇譚集成—聖パトリックの煉獄、2010、238
- ④ 立石博高、千葉敏之(11名中1番目)、山川出版社、国民国家と市民—包摂と排除の諸相、2009、301、14-39
- ⑤ 高橋慎一郎、千葉敏之(8名中5番目)、東京大学出版会、中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ、2009、269、123-150
- ⑥ 近藤和彦、千葉敏之(17名中1番目)、山川出版社、歴史的ヨーロッパの政治社会、2008、606、3-37

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

千葉 敏之(CHIBA TOSHIYUKI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：20345242